意図記憶に及ぼす自己選択効果と自己準拠規準

— 強制選択条件の規準を統制して —

豊 田 弘司

(奈良教育大学)

キーワード：意図記憶，自己選択効果，自己準拠規準

Self-choice effects on intentional memory and criterion of self-reference

Hiroshi TOYOTA

(Nara University of Education)

Key Words: intentional memory, self-choice effect, criterion of self-reference

目 的

自己選択効果 (self-choice effect) とは，自己選択した語が強制選択された語よりも再生率が高い現象である (高橋, 1989)。この効果には動機づけ説 (Perlmutter *et al.*, 1971)，メタ記憶説 (Takahashi, 1991)，多重手がかり説 (Watanabe, 2001)，結合処理説 (Hirano & Ukita, 2003) 等の説があるが，豊田・小林・平野 (2007) は，統合仮説を提唱している。そこでは，偶発記憶手続きを用い，記銘語同士の対比が明確な条件 (快語と不快語対) においてのみ自己選択効果が認められた。この結果は，対比が明確である対は参加者の選択規準が明確であり，その結果，選択された記銘語 (選択語) が認知構造へ統合されやすかったと解釈された。この説は意図記憶 (豊田・小林, 2006; Toyota, 2013) においても支持されている。豊田 (2013) は，自己選択条件における2つの選択規準 (自己準拠，記銘容易性) を比較し，前者が後者よりも自己選択効果の大きいことを示している。これは，自己準拠規準が自己に関する知識に基づいており，その判断規準は明確であるが，記銘容易性規準は複数の判断規準に依存するので明確ではない。それ故，統合仮説からすれば，選択語は自己準拠規準が記銘容易性規準よりも認知構造に統合されやすいと解釈された。ただし，この研究では強制選択条件における規準が自己選択条件と対応していなかった。そこで，本報では，その点を修正して，選択型による自己選択効果の大きさを検討する。

方 法

実験計画 選択型 (自己選択，強制選択) 及び選択規準 (自己準拠，記銘容易性) の参加者内要因とする2要因計画。参加者 看護学校の女子学生 33 名 平均年齢 20.2 歳

材料 記銘語は，豊田 (2013) と同じく，兵藤ら (2003) から選択された漢字 2 字熟語 (例 幸福，希望) であり，快語及び中立語を含んでいた。記銘リストは，快語と中立語を対にして，左右の位置を統制し，自己選択 (自己準拠，記銘容易性) にそれぞれ 6 語ずつ，強制選択 (自己準拠，記銘容易性) にそれぞれ 4 語ずつ割り当てた。リストは Power Point のスライド画面として提示 (Fig.1)。**手続** 意図記憶手続きを用いた集団実験。1) 記銘試行 参加者は，画面に提示された記銘語対から「自分により関係するのは？」という表示がある場合 (自己選択・自己準拠条件) には，自分により関係がある単語を選択して覚えるように，「より覚えやすいのは？」という表示がある場合 (自己選択・記銘容易性条件) には，覚えやすい単語を選択して覚えるように教示された。また，一方の単語に下線があり，「自分に関係しますか？」という表示がある場合 (強制選択・自己準拠条件) には，自分に関係するか考えながら下線のある単語を覚えるように，一方の単語に下線があり，「覚えやすいですか？」という表示がある場合 (強制選択・記銘容易性条件) には，覚えやすいか考えながら下線のある単語を覚えるように教示された。練習用のスライドが 4 画面提示され，説明が行われた。その後，本試

< 自己選択・自己準拠 >

< 強制選択・記銘容易性 >

Fig.1 スライド提示の例

Table 1 選択型及び選択規準ごとの平均再生率

選択規準 選択型	自己準拠		記銘容易性	
	自己選択	強制選択	自己選択	強制選択
<i>M</i>	.51	.21	.36	.25
<i>SD</i>	.22	.27	.18	.26

行に入り，参加者は 10 秒ごとに提示される各画面に示される単語を記銘した。2) 自由再生テスト 書記自由再生 3 分。3) 選択語確認試行 自己選択条件のみの単語対を印刷した用紙を配布し，選択語に丸印を記入。その後，情報提供を依頼するために採点用紙を配布し，再生語の自己採点をしてもらい，それをもとに解説を行った。その後，全員から自由再生用紙と採点用紙の提供を得た。

結果と考察

Table 1 は，条件ごとの平均再生率。分散分析の結果，選択型の主効果 ($p < .001$) 及び選択型×選択規準の交互作用 ($p < .01$) が有意であった。交互作用に対する単純主効果検定の結果，自己準拠規準では自己選択 > 強制選択，記銘容易性規準では自己選択 = 強制選択という関係が示された。前報 (豊田, 2013) と同じく，自己準拠規準を用いた場合が，記銘容易性を規準とする場合よりも自己選択効果がより大きかった。本報では，強制選択条件においても，自己準拠もしくは記銘容易性の判断をさせており，単語を記銘するだけではない。このように，強制選択条件においても判断規準を統制したが，結果は同じであり，選択規準がより明確な自己準拠による選択語が認知構造に統合されやすく，その結果，自己選択効果が大きくなることが明らかになった。前報も本報も意図記憶事態であり，メタ記憶説からすれば，記銘容易性規準が最も有利になるが，それでも自己準拠選択の有効性が示された。このことは，選択規準の明確さが選択語の認知構造への統合を促すという統合仮説の妥当性を示している。

引用文献

Toyota, H. (2013). The self-choice effects on memory and individual differences in emotional intelligence. *Japanese Psychological Research*, 55, 45-57.